

第一篇 社会主義の経済的正義

第一章

社会主義の深遠で根本的な道理は、まさしく宇宙、人生に対する特定の哲学、宗教であって、厳粛な科学的基礎の上に立っている。貧困と犯罪に理性をかき乱されて、むやみに感情と独断を抱いて分別のない行動をとるものではない。しかしながら、貧困と犯罪におおわれた現代社会から生まれて、新しい社会の実現に努力している実際問題であるという点で、論究の順序がまず貧困と犯罪の絶滅とならなければならない。故に、我々は第一篇『社会主義の経済的正義』において、社会主義の物質的幸福を説いている。第二篇『社会主義の倫理的理想』において社会主義の精神的満足を論じ、そして第三篇『生物進化論と社会哲学』として社会進化の理法と理想を論じて社会主義の哲学を説き、社会的諸科学の根本思想となるものを述べる。その上に第四篇『いわゆる国体論の復古的革命主義』に入って、古来の妄想を排して国家の本質及び憲法の法理と歴史哲学の日本史を論じる。そして第五篇『社会主義の啓蒙運動』に及んで、その実現の手段を論じようと思う。

1—1 現代社会において秩序、平穏さは成立しているのか

貧困と犯罪——社会主義の実現によって、人生の悲惨で醜悪な二つのものがまず社会から根絶されるとするならば、社会主義はこの地球を導き、天国に至る道を発見するものだと言える。そして社会主義はこの発見によって、全地球に征服の翼を張るようになった。

ところが、議論はいかに転倒していることだろうか。むしろ現代の政府と学者は、社会主義を迫害し、悪口を言うにあたって、必ず「社会の秩序を乱す」とか、「国家の安寧幸福を傷つける」などと言う。しかしながらこのような偽りは、すでに現在の社会に秩序がある、もしくは今日の国家に安寧と幸福が確実にあると言えて初めて成り立つのである。社会主義は次のように反問しなければならない。「現在の社会に乱すだけの秩序があるのか」、「今日の国家に傷つけてはいけないほどの安寧と幸福があるのか」と。今日の科学的社会主義は、むやみに感情的な言葉をもてあそんで満足するものではない。理性という光が文明の名におおわれていないならば、この反問はまさしく全ての人の口から聞かれる疑問なのである。もしある階級の権勢と栄華を築くために、警察官の洋刀と軍隊の銃剣によって辛うじて支えられている状態を指して「秩序である」と言うならば、現在の社会はこのような秩序が詳細で複雑なものとなったものを持っている。命を失う者が毎日際限なく現れ、財産は野蛮な村落のように、多くを各自の物質的な力によって各自の手で保護されている。それにもかかわらず我々は、財産を保護し、命を安全にするという法律の下で国家の安寧幸福を受けている。社会主義はこのような状態の秩序と安寧幸福を地球が冷却するまで維

持すべきものであるかのように信じるものではないので、政府の迫害と学者の悪口は、この意味からすると、誠実な憂慮から出ているものだとすることはできる。同胞である人類の血と汗を搾り取り、肥満病に苦しむ者にとっては、今日の国家は安寧幸福を与えることができるが、このような栄養物の供給を負担させる社会の秩序は、血と汗を搾り取られる階級にとっては、乱してはいけないほど尊いものとは考えられない。生まれてから死ぬまで脱することのできない永続的な飢饉の地獄は、富豪の天国の隣にある。この餓鬼道の中で餓死することから逃れようとするため、男は盗賊となり、女は売春婦となる。そして国家は赤レンガの監獄を築いて、盗賊に安寧を与え、遊郭を警官に護衛させて売春婦に幸福を受けさせる。この幸福を受ける売春婦を繁栄させるため、売春料によって政府は設けられる。また大量の¹法典は、学者の知恵をしぼり、安寧を与えられるべき盗賊を歓迎するためにある。文明の華であると称する新聞紙は、強盗・窃盗の記事、毒殺・刃傷の報道、老衰者の首つり、貧しい女性の投身自殺、幼児の遺棄、乞食が凍えて飢えていることといった記事をつづりながら、そうした文明の華を紙面に飾っている。そして残忍に慣らされた我々には、その紙面に点々と付着した血痕と紙面の裏から漏れる悲鳴を忘れさせ、このような平凡なものの代わりに、より一層悲惨な出来事の物語を待たせている。このような永続的な飢饉を出す秩序、凍餓の幸福、殺傷の安寧は、学者の奴隸的弁護を受けるような階級にとっては、指一本触れさせるべきものではないのであろう。しかし社会と国家は、社会主義の下で真の秩序と安寧幸福を求めなければならない。ああ、貧困と罪悪よ。これは人類に伴う永遠の運命なのだろうか。キリスト教徒は「これは神の意思である」とこじつけ、仏教徒は「未来に極楽に行くことができる」と偽る。ところが、貧民は、たとえ極楽に行ってもすでにマルサスがいるから、人口論によって入ることを拒絶されるだろう。自己の形に似せて作った男に盗みをさせ、女に売春をさせて生活させるという残虐さは、神の観念と相いれない。むしろそこには悪魔の名がある。

しかしながら、社会主義者は決してこのような障害に対し、いたずらに憤るものではない。新しい理想の前に旧思想が横たわり、進歩を妨げることは社会進化の常である。それらは障害として横たわるとともに、社会維持という任務に服し、新しい社会の誕生をおおう卵の殻のようなものである。そして社会進化の断崖に臨み、権力階級が圧迫することは権力者の権利であって、社会主義は社会の秩序と国家の安寧幸福の名において迫害されることを避けられない。——社会主義が社会から冷笑され、国家から恐れられるのは、それが空想であるためではなく、また激しいためでもない。ただ政府の迫害と学者の悪口があるだけなのである。社会主義！ それはどうして彼らの言うようなものであろうか。

社会主義とは何であるのか。

まず、説明の順序として現代社会の大多数である階級が貧困である原因を考察しなけれ

¹ 原文では「洪流」となっている。「浩瀚」と同意義ではないかと思われる。浩も、瀚も「広い」という意味で、「浩瀚」で書籍が大部になることを表す。要するに、書籍に記すと大量になるということである。

ばならない。どうして大多数は貧困なのか。

1—2 貧困の原因

経済学者は、近代文明の機械工業の結果であると理解している。我々社会主義者もまたそうだと信じている。しかしながら、もしこの問題に対しこう答えられ、それで我々が満足できるならば、それは全くおかしいことだと言わなければならない。鉄道は地球を六十周し、月までの距離の二倍に達しているという。けれど人類の多くは、生まれた土地に植物のように定着し、旅行の自由さえもないのである。ウォーターベリー株式会社²の懐中時計は、一個あたりわずか五分間で完成するというではないか。それなのに、農夫がこの必需品の一個を望むならば、それは贅沢であるとされる。アダム・スミスが分業の利を説くために引用したピンの製造において、分業の結果十人で一日四万八千個作れるとして当時は驚嘆されたものである。しかし今日では、わずかに一個の機械で、一分間に百八十個を製造している。また三人の監督者だけで七十個の機械を運用し、一日七百五十万個を容易に製造するという。農業について見ても、わずか八馬力の蒸気脱穀器は八十人の農夫に休息を与えることができる。蒸気鋤³は一日に五、六町の田畑を耕し、風力、水力、蒸気力によるポンプは、一時に数百町歩の田畑に灌漑することができる。かつて八十年前に五百人の丈夫な男たちが一日かかってやっていたことが、今は監督者が一人いるだけで、機械一つでできるというではないか。一八八七年の古い統計でも、世界諸国の蒸気力だけを合わせても世界の人口、つまり十億人の労働に匹敵すると言う。イリー⁴が言うところによると、アテネの全盛期でさえ、一家に十人の奴隷がいる金持ちはわずかであったのに、今日我々は一家に六十人の奴隷を持つ割合に相当する機械を発明しているというではないか。この近代文明の機械工業は何を意味するのか。——このような農具の発明があるにもかかわらず、かわいらしい幼児の時から腰の曲がった老人になるまで、かかしのように泥の中で一生を送らなければならないとするなら、農具の発明は意味のないことである。人類全ての階級にギリシャの自由民のような精神的活動に入らせるのが本筋ではないか。機械が発明されるならば、発明されただけ社会から貧困が駆逐されなければならない。ところが実際には、近代機械工業のせいで社会の大多数の人々がむしろ貧困に陥っている。これは、「八に五を加えて三となる」と言うような全く転倒した答案である。労働の苦痛に代わるものが機械ならば、機械の発明によって、労働者はその苦痛の時間を減少されるはずである。それなのに、減少は労働時間ではなく労働者の数のほうに来て、絶え間ない失業者を産む。失業者は、さらに新たな機械によって需要されるまで食いつなぐ労働の道がないのである。そして辛うじて道を得た者がいても、不眠不休の機械とともに労働で二十四時間を過ごし、魂のない自働機械と化してしまう。物質的生活の資料を供給するはずの機械は、むしろ勞

² 当時有名だった時計メーカーだろう。

³ 今で言う「耕うん機」のようなもの。

⁴ アメリカの経済学者リチャード・セオドア・イリー (Richard Theodore Ely) のこと (一八五四—一九四三)。

働者の維持してきた物質的資料を奪い、精神的生活に入る暇を与えず、機械の周囲に労働者を精神のない動物としてつなぐようになっている。——貧困の原因はここに求められる。これは機械工業の罪ではない。近代文明のあずかり知らないことであるが、原因はここにある。——つまり近代文明が経済的貴族国だからである。経済的君主、経済的貴族の秩序立った略奪があるからなのだ。

1—3 現代における資本家の存在とはいかなるものか

今日のいわゆる大資本家、大地主というものは、ただ単なる金持ちではない。国家の経済的源泉を私有して、生殺与奪⁵の自由がある点において真の意味での大名、小名である。アメリカの金持ちなどは広大な領土を有し、数万の賃金奴隷を好きなように取り扱え、あたかもルイ十四世のように、主権の本体としての家長君主なのである。数多くの実業雑誌と称される、黄金教の宗教時報とも称されるものを開き、巻頭に載せられた御真影を見よ。石油王誰々、鉱山王誰々、製鉄王誰々、どこどこ銀行の誰々、どこどこの石炭王などが並んでいる。このような尊号は、決して比喻にとり用いられるのではない。彼らは実際に王の尊厳と権力を持っているからである。——いや、現在の世にいる近代国家の国家機関である君主らは、好きなように振る舞う権利を持つ彼らと比較するならば、実に無権力なものにすぎない。独立戦争によってイギリス国王の苛政から脱したワシントンの子孫は、国土及び人民を君主の財産として所有していた時代における絶対無限の権力を持った家長君主らのような資本家たちを奉じ、その下で奴隷として生きているのである。フランス革命の名において皇帝と貴族の手から土地を奪い、自由・平等を叫んだヨーロッパ全土は、このような新しい国王と貴族にあらゆる経済的源泉を略奪され、再び革命以前の状態にもどっている。我が日本においても同じである。かつての貴族は領土を国家に返還させられたのに、国家の経済的源泉を略奪して私有している新たな大名、小名は生まれ始めている。今日、日本の皇帝といえども国家の領土を略奪し、臣民を好きなように扱う権利はない。国土は天皇の私有地ではないし、人民は天皇の所有物としての奴隷ではない。それならば、天下は地主の王土ではないし、その国土に住む人民は資本家の家臣ではないはずである。もしどこどこの王と称される経済界の家長君主らが帝王の名を持たず、大名の称号がないからといって、彼らの恐るべき権力を注意しないならば、それは「王位について朕と称しない者は王ではない」と言う王者の言葉を信じるようなものである。あらゆる政治的勢力は経済的勢力でもある。国土及び人民を所有している経済的勢力の上に立っている幕府時代の大名、小名を見て、単に公債の所有者である今の華族にどれほど権力がなく、遺物にすぎなくなっているかを見よ。そうすれば、限られた王室費によって支えられるヨーロッパ諸国の君主よりも、土地と資本を持つ経済的家長君主のほうがどれほどはるかに強大な権力を持っているかは想像できるであろう。一年の収入が千五百万円であるロシアの皇帝

⁵ どうしようと思いのままであること。

の経済的勢力は、政治的勢力を専制的なものにしている原因であるといえるが、二億八千六百万円のロックフェラー一世が人類の生活に対し、直接的な権力を持つものには及ばない。またトルコの皇帝がいかに東洋の暴君であるとしても、収入が二千万円にすぎないうちは、その二倍以上の収入を持つカーネー^{ゴ・カンガラー}戦勝王⁶が、叡聖文武⁷であらせられる時以上の権力を振るうことはできない。ドイツの皇帝がいかに実質のない神聖ローマ皇帝の名声を踏襲したいために帝国主義を主張したとしても、歳入が千八百万円のラッセル・ゼーグ⁸陛下⁸三分の一の収入にすぎないうちは、その三分の一に相当する権力しか得られないと算段できる。——社会全体の貧困は、このような経済的君主、経済的諸侯の略奪があるために引き起こされるのである。この本来の大名、小名に代わり、再び大名、小名となった地主の下における農奴⁹は、国家に対して多くの権利がない代わりに、地主という大名、小名に対して無限定の服従義務がある。地代、借地料と称される過酷な年貢を納め、少しでも滞納して御意に逆らうことがあれば、土地を取り上げられ、御所から追い払われる。彼らは、「百姓は死なぬように生きぬように治むべきこと」¹⁰と定められた幕府の貴族政治のように、新しい貴族の下でミツバチのように働き、働いて得た全てのハチミツは地代という名においてことごとく取り上げられる。そして彼らは、地主の前に全ての独立を失い、農奴のように土下座しなければならない。大阪の大資本家らが、座して地方の土地を占め、最も冷酷な代官に厳しい取り立てを思う存分していることは、まさに將軍家直轄の御領地における処置のようである。彼らは、地方の地主が古い慣習に制限されて契約をなすのに反し、リカードの地代法則のとおり契約をする。そして土地の騰貴に伴う地代の増加によって契約を継続できなくなるのを待ち、猶予も与えずに土地を取り上げて御所から追い払う。このような権力を持つ者は平等な国民ではなく、単なる地主でもなく、疑いもなく事実上の貴族的な国の君主である。

そうではない！ 彼らは事実上の貴族であるだけでなく、大名という榮譽と権力に伴う尊号を持つ。「殿様」、「御前」などと呼ばれ、その邸宅は旧大名屋敷の跡に立てられ、「御屋敷」と称される。この資本家という者に至っては、工場と名付けられる城郭を築き、学者と政治家とを家老にして、無数の年俸・月給奴隷を武士・足軽として抱え、その勢力下の者に号令をかけ、他の経済的君主と混戦しているのである。彼らが街頭を馬車で駆けると、大名の御通りのように老若男女を追い散らして行く。彼ら大名、小名は今や完全に当代の馬鹿大名となり、忠勤と私利が入り交じった家臣らの画策により、その尊榮と安全を維持している。利子、利潤と称される租税は、家臣らの忠勤によって馬鹿大名をさらに馬

6 カーネーというのは実業家だろうと思うが、具体的には不明である。カーネギーのことか？ ちなみに、原文では「ゼ・コンクエラー」と振ってあるが、「the conqueror」のことだと思われるので、修正して記した。

7 天子が賢明で、文武の徳を兼備していること。

8 アメリカの銀行家。

9 原文では「土百姓」だが、意味をわかりやすくするため、語句を変えた。

10 この表現は、『本佐録』と『昇平夜話』の語句が混合している。『本佐録』では、「百姓は財の余らぬ様に不足なき様に、治むること道なり。」となっており、『昇平夜話』では、「百姓共は死なぬ様に、生ぬ様にと合点致し、収納申付様に…」となっている。

鹿にしている。その租税は大名の知らない方法により、知らない間に河のように流れ込み山のように積まれる。そして周囲の迎合・追従のために、馬鹿大名が「身共」¹¹の体は特別な構造を持っているのだと考えたように、彼らは自分自身を国民と同胞であると考え、それは貴族である面目を汚すかのように感じる。旧大名が道楽半ばに仁政を敷き、快樂を得ていたことがあったように、彼らも慈善の名目において天下を欺こうと試みることはないわけではない。しかしながら彼ら黄金大名は、黄金によってだけ権勢を維持できる大名である。彼らにとって、少しでも黄金を失うことがあれば、それだけで他の大名に対して対抗力を失墜するのである。

1—4 現代版奴隷制度の成立

ああ、このような貴族的な国の農奴と素町人¹²よ！ 彼らは人ではない。商品として見られる。市場価格を持つ。この商品は、魚のように早く売らないと腐敗するものである。市場価格は需要と供給の法則によって支配される。法理的に言えば、彼らは人格ではなく物格¹³とでも言うべきものである。封建諸侯の百姓・町人が所有物として大名の自由な処分の下にあったように、彼らは資本家の自由に処分することができる所有物であって、人格ある国家の構成員ではない。そのため、このような所有物が多く集まると、供給過多によって物価が下落するという経済学の法則に従い、所有物の物価を下落させる。この所有物が空腹によってのたれ死のうとすると、あらゆる条件を考える暇もなくし、貴族らの自由な処分権を認識させる。——つまり、破産者、失業者、地方から追いやられてきた者たちが、工場の門の前に、供給過多と空腹の圧迫を受けて集まることは、経済的貴族国の諸侯たちが驚くべき権力を用い、その家臣がそれに乗じて忠勤に励み、功名を広める機会となるのである。——そしてこの機会がいつも存在し、永続して絶えることがないため、その足に一度縛られた契約の鉄の鎖は墓場まで引きずっていくことになる。ここに厳然とした奴隷制度が復活した。

奴隷制度！ 鎖と鞭があるものだけが奴隷制度ではない。法理的に言えば、人類の人格が剥奪され、他の同胞による自由な取り扱いの下で人が存在するものを奴隷制度と名付ける。つまり、あの戦国時代の封建制度において、土地とともに人民が貴族らの所有権の下で所有物として存在した時と同じ奴隷制度である。我々は、鎖と鞭があった時代の奴隷が三百ドルに値したうちは幸福であったかどうかわからない。けれど、昼は鎖につながれて働き、夜は暗い穴蔵の中で眠ったローマの奴隷と、今日九尺二間の病毒が充満した裏長屋に豚のように親子が重なり合って眠り、一日十三、四時間も長い間一分の休息さえもらえずに機械に縛られる賃金奴隷にそれほど違いがあると信じることはできない。ローマの

11 武士階級が用いた一人称。「我」の意味。

12 「卑しい町人」という意味。

13 人格に対応する言葉として用いているものだが、法律用語にこのような言葉はない。「物格」という言葉には、所有権の客体という意味を持たせているようである。

奴隷は飢えることだけはなかった。けれど今日の契約奴隷、賃金奴隷は、社会の破産、失業、不景気、雨天のために、数日、数十日にわたる断食——そして餓死は珍しいことではない。正義を表すはずの法律は、まさしく明らかに自由と平等を万人に与えた。しかしながら、飢えて倒れていく者の耳に自由をささやき、目に平等な法律を示しても、ひとかけらのパンのほうが正義よりもはるかに高貴である。自由と平等を吸って生活できない動物は、妻子への愛情のためにいかなる苦痛、侮辱をも我慢して、決してその足を顧みて、つなされた鉄の鎖のことを疑おうとさえしないのである。昔、奴隷の子孫は家系によって永久に奴隷となり、近世封建時代の百姓、町人は階級によって子は小作人に、日雇いの孫は日雇いでなければならなかった。敗戦した側の捕虜が奴隷にされ、債務者が我が身を奴隷にして債権者に使われたように、この痛ましい経済的戦闘の敗者と債務者は、賃金奴隷である以外に生きる道がない。ロシアの農奴が、その主人の名を記した金属を首にぶら下げて働いているように、アリのように工場からはい出てくる賃金奴隷は、その印半纏に奴隷の所有主の記号を付けられて侮辱されている。過度の労働時間は、彼らを完全に動物化させ、容貌は黒人のように、野蛮な時代に戻ってしまつてとても粗暴になり、ますます卑しくなっている。かつてアメリカ合衆国の南部において、「四年間に利益を得尽くすため、奴隷を限界まで酷使し、のたれ死にさせる」との動議が提出され、それが連邦議会において拍手喝采で可決されたことがあった。それと同じように、天命を短縮する長時間の労働、人の本性を害する女性、子供の労働を禁じる工場法案が、大日本帝国議会においてうやむやの間に消え去ったことがある。ローマの奴隷で病気になった者がいる時は、食事や薬を与えるよりも、もっと丈夫な奴隷を買い求めるほうがはるかに利益であるとして、病気の奴隷を川の中州に捨て、泣き叫ぶのにも構わず死なせたと言う。けれど今日の労働者は、病気、老衰ではなく労働によって受けた負傷でも、職にたえられないとして捨てられる。しかも捨てられるのは大都会の中央においてであり、無知な世間の人々は、彼らが病気で苦しみ、道端でうめいているのを、あたかも少年が湖に打ち上げられた猫の死骸を見ようとして集まるように、周囲を取り巻いて哀れみと好奇の目で眺めている光景はよく見る所である。農夫などは土地とともに売買される。ローマ人のいわゆる「話せる農具」というものであり、中世史における農奴である。そしてこの奴隷の繁殖は、安い黄色奴隷として海外に輸出される。あの国法の保護によって成り立っている移民社会というものは、厳然とした奴隷貿易商人ではなければ何であるのか。——貧困の原因は近代文明にあるのではなく、機械工業にあるのでもなく、まさしくこの経済的貴族国が存在することにある（貴族国、家長君主、奴隷制度などの法理的意義及び歴史的説明については、さらに第四篇の『いわゆる国体論の復古的革命主義』及び第五篇『社会主義の啓蒙運動』を見よ）。

1—5 転倒した個人主義

14 原文では「捜みて」となっているが、読みがわからない。文脈から「ぶら下げる」と訳した。

それなのに理解できないことは、かつて貴族国の貴族政治と奴隷制度を打倒した個人主義が、今むしろこの新しい形式の貴族政治と奴隷制度を弁護し、経済的貴族国の維持に努力していることである。それは、きらめく国家という衣服に目がくらみ、中身が醜いものであることを忘れた、いわゆる旧派経済学というものである。

もちろん、社会主義は個人主義と根本思想において相いれないのだが、個人主義の理想がいかに文明史の潮流を指導していたかを考えるならば、個人主義の尊い意義について決して不注意であってはいけない。人類の歴史が、進化の断崖に張り落ちようとした時¹⁵、つまり過去の革命は常に個人主義の名においてなされてきた。ルターがローマ法王の権力に対して、思想の自由を叫んで立った時から、フランス国民が天賦の平等を論じて、マルセイユ城に突撃した時に至るまで、個人主義はまさしく革命思想の源泉であった。これは理由があることである。個人主義は、説明の理論としては一つの仮説にすぎないが、理想として考えるならば、ある種の高貴なものを持っている。社会の組織は自由の活動を理想とすることにおいて進化するのであり、人類の幸福は万人の平等を理想として達成されるのである。今日の野蛮人は、いかなることをしようとも、数百千年来の奇異で残忍な古い慣習を脱することができず、個人はただその奇異な習慣や残忍な迷信の犠牲として生まれているようである。老いた父母を殺して饗宴をする習慣も、幼児を捕えて猛獣に捧げる迷信も、ひとたび古くからの習慣とされるや否や、個人は少しも疑うことさえできない。そのため、彼らは数万年を経た今日になっても、依然として食人族の野蛮な習慣にとどまって進まない。我々の歴史も、初めはそうならざるを得なかった。当時は、ただ社会的本能によって社会的動物として存在している社会を維持し、他の社会と生存競争をすることだけに忙しかつたので、個人は全く犠牲となる他なかった。エジプトの驚くべき文明も、その意味では単に王及び僧侶の無用な土木の結果にすぎない。しかも個人は、何のために彼らの犠牲とならなければならないについては、少しも考える所がなかったではないか。バビロンの栄華もそうである。アッシリアの繁栄もまたそうである。ギリシャ・ローマの晩年になると、少々個人の権威が認められるようになったが、それでもソクラテスは無知な群衆に思想の自由を踏みにじられ、自ら社会、国家という名の前で偉大な人格を放棄し、毒盃を仰いだ。ローマの首都は貴族と乞食の都であったが、個人は何のために乞食とならなければならないかということに疑問はなかった。以後千年の間、いわゆる中世の暗黒時代となって、未開のゲルマン民族が文化的に開化するまで、ローマ法王の名において社会の圧力は全ての個人を無視した。全てのもの——習慣、座ること、行為、言語、思想、政治、法律といった天下のあらゆるもの——は法王の一命の下に存在するようになっていた。司祭の破戒、僧職の売買、免罪符も少しの疑問もなしに信じられていた。これは法王一人の専制ではなく、社会の権力が法王を通じて個人を踏みにじった結果である。——歴史の進化は個人の人格の覚醒によるのである。人類は宗教革命により、個人の権威を知り、「信仰

¹⁵ よく意味がわからない。とりあえず文字通りに訳しておく。

の自由」を得た。——個人の人格の覚醒は歴史の進行に伴い、さらにその覚醒を広げていく。人類はさらにフランス革命の名において貴族と皇帝を打倒し、ここに「政治の自由」を宣言した。「無用な貴族に土地を私有させ、国民を奴隷としてはならない」、「国民の運命は、たまたま生まれがよかった国王一個人の手元に置かれてはいけない」と。個人主義の経済学は、この革命の風潮に乗じて唱えられたものである（第三篇『生物進化論と社会哲学』において偏局的社会主義と偏局的個人主義を論じた所を見よ）。

個人主義の旧派経済学は、まさしく過去の貴族国の経済組織を変革するために起こり、革命の任務は十分に尽くした。——歴史は経済界のルソーに感謝しなければならない。アダム・スミスの『国富論』は、まさしく貴族国の経済組織に対する革命の「社会契約説」ではないか。全ての分科的諸科学は、時の根本思想である本流の支流である。個人主義という大潮流は、ルターにおいて信仰の自由となり、ルソーにおいて政治の自由となり、そして彼アダム・スミスにおいて「職業の自由」となって発展したのである。スミスの時代における貴族国の経済組織を見るとわかるクモの巣のような法制度、雑多な習慣、慣例は、全部破壊しなければならないものであった。つまり革命を行う他なかったのである。国内に刺激を与えるに不可欠な外国人の営業を排斥するために居住法があった。その居住法に従って組合に属しなければ、何人もその都市で営業をすることができなかった。このため、ジェームス・ワットも、発明した蒸気機関を用いて営業することをグラスゴー市に拒絶された。公平と名付けられた判事という、資本家と労働者の間に立って、賃金を公平に決定するとの名目を持った権力階級の残虐な爪牙があった。国家の名において職務を行うが、実は経済上の知識もなく、誠実さも公平さもない官吏の心によって物価を公定する専制があった。組合の権力は絶頂に達し、見習い工の年期¹⁶、種々の慣習から製作品の品質、形状、大小に至るまで好きなように制限を設け、一步もその外に出られなかった。そして無用な貴族、国王らの特別の保護によって許された無数の独占営業があった。経済界の社会契約説は、こうして経済的方面から貴族国に対する革命的任務を果たすために、書かれたのである。

今『国富論』を継承する個人主義の経済学者で、真に個人主義の意義を理解する者がいるならば、それによって今の経済的貴族国を弁護するようなことはまさしく個人主義の反逆者である。今の社会に個人の自由があると言う者がいるならば、それはそれらの音響を発する時の唇にだけ存在する。唇にもなく、言論の自由、思想の自由は遠い昔に去った。ルターの信仰の自由によって戦った新教徒の子孫は、今や黄金大名の寄付金のために信仰の自由を売却し、それに仕える牧師となって、ルターの時代における旧教の地位に置き換わってしまった。ルソーの政治の自由によって得た血で染まった憲法は、今や黄金貴族の玉座を築くための礎石となるにすぎなくなった。

¹⁶ 原文では「徒丁の年期」となっているが、「年期」というのは「年季」とほぼ同じ意味であるので、「徒弟の年期」と同じ意味であろうと考え、その意味で訳した。

1—6 自由競争の欺まん

スミスの職業の自由は、今どこにあるのだろうか。経済的貴族らが、その縁故者と寵愛する者によって職業の統治権を独占するため、経綸¹⁷の才能にあふれる者も、わずか三、四十銭の賃金によって生涯を暗い鉱坑の中で送らなければならない。自由競争によって彼に取って代われと言うのか。徳川の封建制度の中で、剣一つで天下を勝手気ままに歩いた戦国時代を夢見る者、今の法律や経済を学んでいる青年の学生は全てこれと同じである。由井正雪¹⁸らにとって、馬鹿大名の下で土下座する封建時代よりも、戦国の昔ははるかに己を奮い立たせるものだっただろう。もし剣一つで徳川の封建制度に反抗し、諸侯に取って代わった者がいたならば、猿のように口よりも手で生活している労働者は、座って一時間に数百万円ずつ利潤を出す経済的諸侯に取って代わることができるだろう。あるいはかつての山田長政¹⁹のように、アメリカに渡航し、満州、朝鮮に赴いて経済的諸侯となろうとするか。けれど海外の領土は、すでにもっと大きな諸侯らによって分割され尽くしているのではないか。今日三井、岩崎のような地位を望む者がいたら、日本の皇帝となるという不可能なことを企てるように——不敬な男とまでは呼ばれるべきではなくても——発狂者と見られることは言うまでもない。自由競争とは競争すべき機会の自由な獲得を前提としての立言である。重い一台の車に老病の父母、貧血の妻、飢餓に泣く子女を載せて、よろめきながら坂を上っていく失望した子を、軽く、上品な出で立ちで、肥えた馬に鞭を振るって、彼らを嘲笑して過ぎ去る者がいるとするならば、自由競争には地獄が存在するのだ。か弱い女、子供、かわいらしい幼児を駆り立て、生涯やかましい機械の下でつながれ、決して顔を拝むこともできない工場の主と自由に競争せよと言うものである。これは封建諸侯と一農奴が自由競争できる環境にあると言うのと等しい。まさに残酷なほど人を侮辱、愚弄している。自己の思いのままにできる奴隷が戦うべき武器を持たないことを知っていながら、しかも自分は教育、財産の鎧に身を固め、雲のような家臣に護衛され、資本の槍をきらめかせて対等の勝負を求める。これは自由競争ではなく、捕虜の虐殺である。スミスは自由競争のために自由競争を説いたのではない。貴族国を打倒するために、自由競争が対等に行われる平等な世界を理想としただけである。ところが、今や再び麗しい自由・平等の法律の衣をまとった経済的貴族国が建てられ、社会は当時のように上下二つの階級に越えられない空間を作り上げ、分裂状態を作った。職業の自由は空しく『国富論』の紙上に残るだけである。——見よ、我々は囚人のように機械の周囲につながれている。人類の労働に代わると期待された機械は、今や貴族階級の城郭となって、かつて平民を威圧したように社会全体の上でやかましい音を立てている。社会から貧困を駆逐するために歓迎された機械は、今や貧困者の首を絞め、はりつけの刑に処し、首絞めとはりつけを免れた幸運

¹⁷ 「経世済民の方策」という意味。

¹⁸ 由井正雪は江戸初期の軍学者。家光の死に乗じて倒幕を企てたが、事前に発覚して捕らえられた（慶安の変）。ちなみに、由井正雪は紀州を何度か訪れており、この由井正雪の企てには徳川頼宣（家康の十男）が関与していたのではないかと疑われている。

¹⁹ 山田長政は、江戸時代初期、シャム（今のタイ）に渡り、日本町の長になるなどの活躍をした。

な者をも失業の不安で脅かしながら運転する。ああ、機械の発明に反比例する貧民階級の拡大と失業者の発生が驚くほど速いことよ。このような石の壁と溝で築いた物見やぐらよりもはるかに金城鉄壁の機械で黄金貴族が守られる状況で、どんな自由競争があろうか。自由競争は階級に合わせて二つに分類されるであろう。つまり、黄金貴族間の残虐な経済的混戦の放任、賃金奴隷間のパンくずに対する餓鬼的争奪戦の二つである。——尊い個人主義と我らがスミスは、このようなことのために自由競争を説いたのだろうか。『国富論』が子供のおもちゃに近いニューコメン²⁰の蒸気機関をただ一カ所において、しかも偶然引用したにすぎないのは、彼が百年前の人だからである。彼が今存在するならば、今日の経済学は機械のことを本論とし、他は全て付録に組み替えよと言うだろう。今日、社会のあらゆる問題は機械から湧き出してくる。社会的現象の全ては機械を中心として回っている。機械という封建の城郭を貴族階級に占領させるべきか否かが、まさしくあらゆる社会的諸科学の根本問題である。

個人主義が根拠のない誤りであることは後に説く。ただ誤っているにしても、これを今日の経済的貴族国の下において唱えようとする者がいるならば、その者はかつてスミスがしたように、革命の先鋒とならなければならない。経済的貴族の御前に土下座して、意味もなく望みのない賃金奴隷をだまして職業とするようなことは、その者にとっては職業の自由であるが、スミスはそのことを聞けば地下で泣くだろう。いや、個人主義の論理的帰結は、国家を「やむを得ない害悪」と名付けるような無政府主義に至る。あの個人の絶対的自由に憧れて無政府主義を唱える者などが現われるのは、個人主義を論理的に推し進めた当然の結果である。そのある者は爆弾などに訴えるために強大な力で禁圧されるが、現代社会の「やむを得ない害毒」を個人主義の立場から讚美している者は、爆弾よりも大規模な餓死に訴えて、その主義を実現している。まさに公の許しを得た無政府党员なのである。社会主義にせよ、個人主義にせよ、現代社会が経済的貴族国であることを認めるならば、ことごとく反対の側に立たなければならない。今日、日本において引くくめて社会主義と評価されるものの中には、依然として旧式の独断的な自由・平等論を唱えている個人主義者で、現代社会においても革命はやむを得ないと認める者がいる。それは現代社会に反対する者の例である（そのため、彼らは広い意味における社会革命家とすることができる。そのことは後に説く）。

²⁰ イギリスの技術者。一七一二年に最初の実用的蒸気機関を発明した。